

御 挨拶

中 村 歌 右 衛 門

皆様、本日はお暑い中をわざわざお運び下さいまして誠に有難うございます。

「葉月会」も今年第六回を開催致す事と成りました。是もひとえに皆様方の温かいご支援によりますますものと深く感謝いたして居ります。

「葉月会」は、中堅、若手俳優の芸芸発表の場であるとともに、歌舞伎邦楽若手の勉強発表も盛んに成って参りまして、誠に喜ばしい事と存じて居ります。

第二回より、お芝居の発表に力を入れましたところ、ご好評を頂きまして、出演者一同、毎年張切って稽古をいたして居ります。

今回までに、「どんどろ大師」「朝顔日記」「身売りのかさね」、そして昨夏は「東海道四谷怪談」を発表するまでになりました。是もひとえに皆様様の御声援のお蔭様と厚く御礼申し上げます。

今年は、お暑いさ中の開催も考慮いたしまして、夏狂言にふさわしく、「夏姿女団七」を発表させて頂きます。江戸歌舞伎らしい、粋な狂言でございます。出演者一同の稽古にめんじて何卒その成果を見てやって下さいませようお願いします。

加えて、邦楽若手の勉強を二題の舞踊で発表させて頂きます。併せてご覧下さいますようお願い申し上げます。いずれにいたしましても、未熟者ぞろいでございますので、さぞかしお目まだるき点の多いことと存じます。なにとぞ温かいご声援の程をお願い申し上げます。

尚、毎夏の開催にあたり、惜し身なくお力添え下さいます指導の諸先輩はじめ関係者各位、殊に国立劇場の皆さんには多大のご協力をいただき、本当に有難く、この機会に厚く御礼申し上げます。

(伝統歌舞伎保存会会長)

昭和六十二年八月

第六回 葉 月 会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優 研修発表会 歌舞伎邦楽若手

一 浅 妻 舟 長唄囃子連中

二 上 夕 清元連中
下 鷺 立 竹本連中

三 夏姿女団七 三幕

序 幕 柳橋草加屋の場
二幕目 両国 錨床の場
大 詰 浜町 河岸の場

二世桜田治助 作
中村梅 花 指導

加賀屋 歌 江	中 村 駒 助	尾 上 梅 之 助	市 川 八 百 穂	市 川 瀧 二 朗	澤 村 吉 次	中 村 又 之 助	市 川 段 之 次	實 川 福 次	市 川 若 之 介	中 村 猿 十 郎	中 村 鶴 乃 助	中 村 歌 女 之 丞	山 崎 権 一	實 川 延 寿	加賀屋 歌 蔵	中 村 時 蝶
神田和幸	久保清二	小柴俊哉	小島孝文	近藤孝弦	三枝英彦	柴山二美雄	鈴木俊之	田村俊晴	手島和也	三宅 貴	長唄連中	鳴物連中	竹本連中	清元連中	中村梅花	中村梅花

(第九期歌舞伎俳優研修生)

八月七日(金)

昼ノ部 十二時三十分 開演
夜ノ部 五時 開演

主催 国立 伝統歌舞伎保存会
後援 国立 劇場

尾上菊之丞 指導

浅妻舟

長唄囃子連中

白拍子朝香

尾上梅之助

へさぎなみや、八十の湊に吹く風の、身に沁みそむる比叡おろし……

ト、置唄があつて 白拍子が烏帽子水干姿に鼓を持って舟にのつて、セリ上つてくる。

へこのねぬる、浅妻舟の浅からぬ、契りし昔の驪山宮、……

ト、莊重に舞い始め、やがて羯鼓の踊り、つづいて、

へ筑摩祭の神さんも、何故に男はそれなりに、……

ト、クドキ模様になり、つづいて振鼓の振りもあつてやがて舞い納めになります。

浅妻は、朝妻とも書き、近江の琵琶湖の東岸にある地名で、今の米原駅の西にあたる。

昔は、京都から東国へゆく旅人が湖上を横ぎつてこの浅妻の入江が船着場になっていたので、旅の枕に情をうるうかれ妻も沢山いたらしい。画家の英・蝶が流されの身となつていた時代にこの地の遊君の風情を画作し、後にこの絵から作詞、作曲が生れたと伝えられている。



藤間勘十郎 振付

上夕立

結城七之助	勘之丞	浄瑠璃	清元榮志太夫
遊女多喜川	歌江		清元志寿子太夫
相合傘の若者	福次		清元美好太夫
同 町娘	段之	三味線	清元美弥太夫
		上調子	清元美治郎
			清元勝三郎
			清元邦寿

下鷺娘

鷺娘	加賀屋歌江
浄瑠璃	竹本葵太夫
	竹本泉太夫
	竹本幹太夫
三味線	鶴澤正一郎
	野澤松也
	鶴澤泰二郎

へ夕立の雨も一と降り馬の背を 分けて 涼しき川岸に……ト、有名な出だしで始まり、

へ草の葉に やどりし月も小夜風に 憎やこぼれてばらばらと……で端唄を聞かせ、

へ粹なお方につり合わせぬ 野暮なやの字の屋敷もの……から、クドキになる。

素晴らしい「夕立」の全詞をご紹介できないのはまことに残念です。今年の振付は、皆様おなじみの「小猿七之助・滝川」の人物に興味を加え、「七之助・多喜川」に変えて振付の妙をお見せすることになりました。

本文はあくまで「夕立」に変わりなく、伝統的な舞台を継承してあります。葉月会の出演者にふさわしく、趣向をこらす振付の真髓を、下の巻の「鷺娘」と共にお楽しみいただけますようご案内申し上げます。

作詞は二世桜田治助、作曲者は二代目杵屋佐吉である。出演は尾上梅之助、梅幸師匠の極め付きの舞台は学んであり、第四回葉月会の「汐汲」から「鷺娘」に続く今回の出演であるだけに、その成長ぶりが期待されている。

指導は、第四回以来ひきつづき特別稽古を続けて下さっている尾上流家元の菊之丞師である。

今回の「鷺娘」は、義太夫浄瑠璃を地とする珍しい舞台で、歌舞伎公演にお目見得するのは初めてである。

江戸末期、春夏秋冬の四季にちなんだ演奏のころみに、「冬・鷺娘」を義太夫で演じた故実にならない、藤間勘十郎師が振付けを手がけた作品です。

小品ながら、主題は長い冬を終えて、すぐそこにきている春の喜びをおさえきれずに嬉しそうに踊る町娘を舞台にあらわしたもので、おなじみの「鷺娘」の中の、娘の踊りを抜き出してご覧いただくことになります。

「夕立」の傾城から、町娘に替って勤める歌江の舞台に期待が寄せられます。

三世桜田治助作
中村梅花指導

夏姿女団七

序幕

本舞台、上手より一重屋台の待合茶室の体。ここに清七、琴浦のおてつを真中にして、若いもの、岩松、松六、玉蔵、女中のお杉、お芳、お種、若々酒を呑んでいる。端頭に祭りの囃子をきかせて幕あく。

(よりすい)
(台本抜)

「あらすじ」
さる藩中の侍、玉島磯之丞は、お預かりのお家の重宝、千寿院の宝刀を詮議の為、道具屋の養子清七になりすましていたが、吉原の遊女、花扇屋の琴浦と馴染み、琴浦に大九郎という侍客が横恋慕して身請けしそうになったので琴浦をひそかに廊から抜け出させ、柳橋から葎町かけての顔役、釣舟の三婦を頼って柳橋の待合茶屋草加屋にかくまっていた。岩松など若い者は「名つての釣舟親方が後ろ楯、安心していなせえ、吉原から何が来たって、おてつさんは渡すこっちゃねえ」と、鼻息が荒い。

配役

道具屋養子清七	鴈乃助
実ハ玉島磯之丞	梅之助
花扇屋抱琴浦	猿十郎
前名 おてつ	同 松六
釣舟の若い者岩松	同 玉蔵
同 松六	福又之助
同 玉蔵	段久保清二
草加屋女中お杉	同 お芳
同 お芳	久保清二
同 お種	近藤弦

と、そこへ吉原の追手、吉六と和助が琴浦を取返しに来た。「返せッ」渡すもんかッ」と争ううち、危ふく琴浦が担ぎ出されようとした時、侍と中間を従えた立派な女乗物の一行が通りかかり、その侍が吉原方を投げとぼして琴浦はやつと助かった。おてつが札を云っていると、乗物の戸があいて出てきたのは立派なお局の老女、いきなりおてつに向って手を支え、「アイヤ 姫君様には余りの端近、先ず 先ず」

一幕目

祭りの地口行灯を立て廻し、下手寄りよき処に描いかりの瓊簾(のれん)をかけた床屋あり。ここに前幕の岩松、松六、玉蔵と、吉六、和助立ちかかり。

(注) 上手に「二本、高札を立てておくこと。」

あらすじ

琴浦のおてつが両国の河岸を歩いていると大九郎、味番頭伝八に撞つて連れてゆかれようとした。逃げ廻っていると、通りがかったのは団七縞のお梶、忽ち伝八を取り押さえてねじふせ、おてつに「こんな所をうろついていると危ないから、早く三婦親方の所へ行くがよいと道を教えてやった。伝八を追っ払って自分も後を追って行きかける処へ、「一寸待って下さんせいなア」と声をかけたのは同じ柳橋の芸者仲間の一寸お辰、傍には大九郎がいるので、さてはお辰は大九郎の「味か」とお梶は踏みとどまって互いの意地づく、達引から、たんかのやりとり、果ては女だてらの腕づくの争いとなった。と、そこへかけつけて間に入ったのは、このあたりきつての大親分、釣舟の三婦、まあ、待ったと留男になったので、二人も顔を立てて刀をひいたが、その時、急にお辰が、「ソレ、お梶さん」と、最前大九郎から借りた刀を渡した。見ればまさしく磯之丞の詮議している、千寿院の刀、「そんなら矢つ張り推量通り……」と、お梶は大喜び、「よかつたねえ、お梶さん」と、お辰。つまりこの刀をとり返そう為に、お梶はお辰としめし合せて敵同志のように見せかけていたのであった。ところへ、「大変だ、おとら婆さんが清七さんをだましてかこにらせて連れ出した」といしらせ、お梶はおどろき、「又お母さんが悪事を企らんで……」そんならわたしは是から直ぐに追ッついて磯之丞さまを取返してこようわいなア」と三婦とお辰に後のことは頼み、さんにかけ出すのだった。

新登場人物

一寸お辰	歌女之丞
節間大九郎	駒助
番頭伝八	若之介
釣舟三婦	勘之丞

二幕目

と敬う。驚くおてつに老女はうやうやしく云うのであった。私は藩州高砂家の中老、あなた様は殿様のお胤であったが、三つの年に奥方様の情氣を恐れ家老林三太夫の娘と偽り、町家へ里子に出したが、その後奥方が亡くなられて引取ろうとした折、その里親ぐるみ行方不明となられたので、この十八年間懸命に探した揚句、漸くあなた様と分つて迎いに参りましたという。そしてその証根には、といて短冊まで見せておてつをすっかり信じ込ませてしまった。

それでは早速お館へ、とおてつを連れだそうとした矢先へ、「まあ、待って下さんせえなア」と声をかけて出てきたのは団七縞のお梶という芸者、かねて磯之丞にはその父兵太夫から父の命を助けられた恩人として守護している俠気のある女だった。お梶はその迎いには不審があると出て来たのだが、局を見てびっくり、心よからぬ継母のおとら婆であった。さては大九郎に頼まれて、こんな芝居をしたのかと諫めたり、嘆いたり、おとら婆の皮をはがされて「お梶、覚えていやアがれ」と、尻尾をまいて帰って行った。

配役

団七縞のお梶	歌江
中老 六浦	延一
実ハおとら婆	森下 甚内
同 森下 甚内	権一
吉原神楽獅子の自分	吉六
和助	国次
偽 岩党	小島孝文
同 岩党	神田和幸
駕籠 中間	小柴俊哉
同 駕籠 中間	三枝英彦
同 手島和也	手島和也

三幕目

本舞台大川端。上手寄りに釣帳戸あり。四ツ目垣、下手寄りに泥仕合の切穴。

あらすじ

「オーイ、そのかこ待った」と、声をかけてお梶が走ってくる。かこの中の人を返して貰いたい、と云うのに大九郎は「さっきだまされた仕返しにつれ出した代物だが、それ程ほしくばやろうから、自分でかこから出してゆけ」と云い、かこやと共に立去った。礼を云って垂れをあげると、中には磯之丞ならぬ、継母のおとら婆であった。「娘よ、よう貴いにきてくれたねえ」おとらは毒々しくぶつて出てくる。そして清七の行方を教えてくれというお梶を、じらしたり、毒づいたり、打ったり叩いたりして、ついには顔に傷をつけたりまでするのだった。お梶は歯をくいしばって辛棒したが、つい脅しに抜いた刀が誤っておとらを傷つけて、「人殺しィ」と大声をたてるので、今は是非ないことと、斬りかかる。二人は祭囃子の聞こえてくる中を立廻り、とうとうおとらは殺されてしまった。「悪い人でも義理ある親」と、お梶は今更罪の深さに慄然としたが、こうしてはいられぬと、死体を始末した後、折柄やってきたおみこしがつぎの人達にまぎれて逃がれてゆくのがあった。(幕)

配役

駕籠 八百稔
同 瀧二郎
彫りものの若い者 吉次
祭りの若い者
神田和幸 小柴俊哉
小島孝文 近藤 弦
柴山美雄 鈴木俊之
手島和也 三宅 貴

四世澤村源之助を偲ぶ

「女団七」を得意 「田圃の太夫」で有名



「夏祭女団七」
澤村源之助

「東京の小芝居」という本のあとがきに著者の阿部優蔵は次のように書いている。

十一の時、はじめて芝居を見た。私が連れて行って貰う芝居では、主役をやるのはいつも羽左衛門か菊五郎であり、脇役には照蔵や荒次郎や菊十郎がいた。祖母や母の話では、羽左衛門や菊五郎は勿論上手だが、照蔵も荒次郎も菊十郎も巧い役者だという。それなのに照蔵、荒次郎、菊十郎はいつも脇役である。私には、それがとても不公平なことに思えた。どうして荒次郎が仁木弾正になったり、菊十郎が切られ与三郎になったりしないのだろうか。

このあと祖母や母が、小芝居というものがあって、そこでは普段脇役しかしない人達も由良之助や勘平をするのだと、幼い著者に教えるところが書かれている。

澤村源之助は、この小芝居の人気役者で、明治・大正に活躍した。

それこそ、由良之助から御所五郎蔵、髪結新三、伊右衛門、梅の由兵衛、切られ与三郎等の立役を演じ、女形の演し物で

は、今回の「女団七」(写真)をはじめ、王妃のお百、鬼神のお松、蝮のお市、切られお富など、まさに多彩をきわめている。

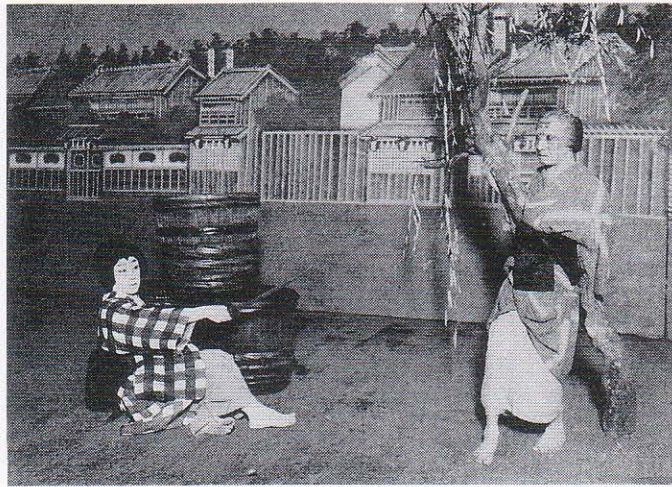
源之助がこうして芝居好きを唸らせた舞台は、浅草の千束町にあった「宮戸座」という劇場で、有名な十五世羽左衛門や、初代の吉右衛門も修業した小屋であった。いわば小芝居の代表的存在で、後に宮戸座の座頭を張った源之助は、近くの浅草田圃に住むところから、「田圃の太夫」と畏敬される迄になった。大芝居に対する小芝居の腕達者を好んで見に出かけた多くのファンを如実に物語るものであろう。その人気の大きさは、今日の劇壇からは想像以上の規模であった。

戦後はカブキをがらりと変えた。小芝居は、「かたばみ座」の灯を最後に完全に消えたものの、多くの名狂言はうけつがれていった。

源之助の当り役から「切られお富」を上演して戦前戦後の歌舞伎ファンをうならせた三世中村時蔵は、昭和24年7月の三越劇場で「女団七」を上演、さらに昭和33年6月の東横ホールで再演して団七縞のお梶を舞台にとどめた。

女形の魅力にはいろいろの表現がある。情をたたえ、伊達を好み、伝法のなかに粋をこらした江戸芸者の美しさを、時播磨の舞台にみた芝居好きの中に、小芝居の伝統が昇華されて受け継がれていたのである。

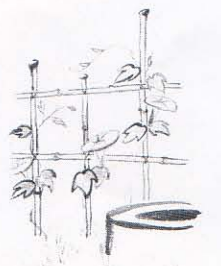
その時から早くも三十年。今回の「女団七」の上演が、先輩名優の舞台にどこまで勉強できるか、期待の目が注がれるゆえんである。



「夏祭女団七」

お梶=源之助 おとら婆=小団次

(写真提供 早稲田演劇博物館)



61. 8. 19



「東海道四谷怪談」 砂村隠亡堀の場

〔左より〕

伊右衛門＝幸右衛門 与茂七＝辰夫
小平女房お花＝歌江 直助権兵衛＝幸太郎



「藤 娘」 藤娘＝梅之助



「羽 衣」

天津乙女＝歌江 漁師伯了＝幸右衛門

年に一回、八月に研修発
表をする「葉月会」は、昨夏
の第五回では勉強会では初
の「東海道四谷怪談」(二幕
四場)を上演、加えて舞踊の
二本立て「藤娘」と「羽衣」を
上演いたしました。

ご覧になられた皆様に
は、思い出のアルバムと
して、又ご覧になれな
った方々には、ご想像の
しおりに、この舞台記録
写真をお届けします。

思い出の舞台
今年の舞台から
第五回
葉月会
思い出の舞台



「東海道四谷怪談」 四谷町伊右衛門浪宅の場

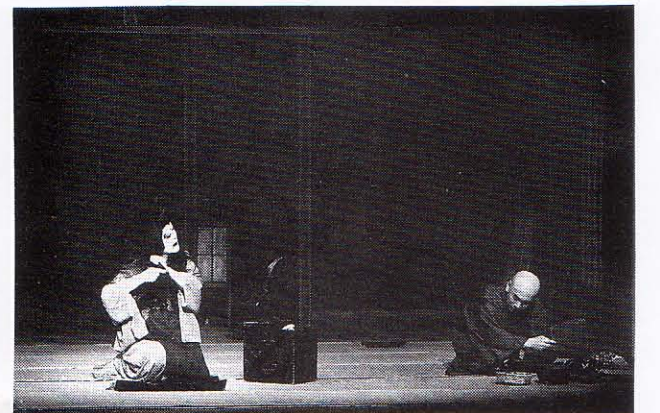
民谷女房お岩＝歌江



「東海道四谷怪談」 伊藤喜兵衛内の場

〔左より〕乳母おまき＝梅之助 孫娘＝扇之丞

伊右衛門＝幸右衛門 喜兵衛＝欣弥

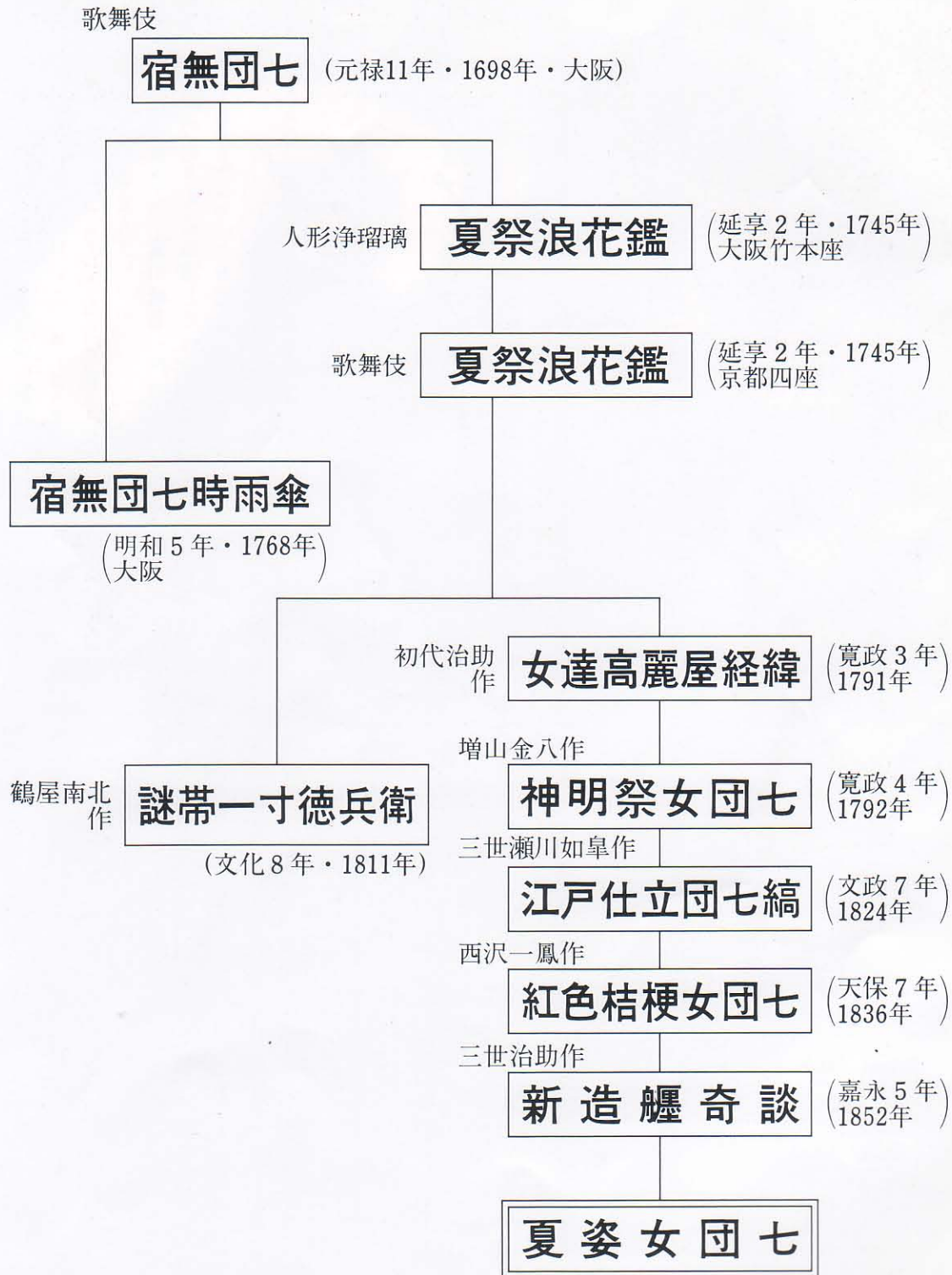


「東海道四谷怪談」 元の伊右衛門浪宅の場

お岩＝歌江 按摩宅悦＝大蔵

(撮影 石井雅子)

団七物の略図解



「夏姿女団七」
お梶=三世時蔵 おとら姿=団七之助
(写真提供 早稲田演劇博物館)

その同年に早くも歌舞伎で上演、こちらは京都の万太夫座、布袋屋座などで競演され、江戸でも森田座で初演されている。ことに、芝居では、三・五六七段目が繰返し上演されてゆき、今日の舞台化の原型がこの時期にもう確立されたのも珍しい。殺し場の「渡り拍

竹本の浄瑠璃の替りに、江戸長唄の合方で進行し、殺し場も長町裏から、大川端に移る。元祖の上方では、自由奔放に替えることのできる源泉水のような権利を持っていても、新興地の江戸では、全面的な換骨奪胎はできない。後進の墨守は堅く維持されていたのである。せい／＼、お梶お辰の活躍に限られていたのであろう。釣舟の三婦の据え置きなど、今日では見えにくい。著作権のような考え方の原型がこの時代だからこそ、すでにあったのではなからうか。この点、人物の名前だけ借りて、全く違う「団七物」を書いた、鶴屋南北の「謎帯一寸徳兵衛」の存在は極めて興味ふかい。

「夏祭浪花鑑」の影響

魅力ある

「団七縞」の系譜

「女団七」の流行を生む

元祖「団七九郎兵衛」が始めて歌舞伎に登場するのは遠く三百年前、元禄11年の「宿無団七」という狂言に、徳兵衛、三婦と共に現われる。
しかし、決定的に大阪の人気者になったのは、やはり人形浄瑠璃が上演した「夏祭浪花鑑」で、全盛時代の延享2年、有名な、千柳、松洛、小出雲のトリオが寄り、九段続きの長編を発表した。
これは歴史上始めてで、時代物と並べてみて少しも劣らない立派な世話物として第一作の地位を獲得した。
当時の人形遣い吉田文三郎は、多くの創案をはかり、団七縞、徳兵衛縞と今日迄呼ばれる衣裳の考案、殺し場における

子」とよばれる鳴物をつかって団七の怒りを高めてゆく手法、みこしの演出、刀を使った見得の連続、すべて歌舞伎の音楽、絵画、姿態の美しさを十二分に表わした「夏祭」は、独自の領域を今日まで伝えていく。
「女団七」は、この「団七もの」の素晴らしさを、女で見せようという、いわゆる書替狂言で、これがぞく／＼と発表舞台化されてゆく。その流れは別掲の略図のごとくであるが、初代の桜田治助、増山金八、三瀬川如臯、西沢一鳳などの作者がみな手がけたが、三世桜田治助の書いた「新造艦奇談」(しんぞうつりふねきだん)から三幕にまとめたものが、今日の「夏姿女団七」である。
ここでは、団七の女房お梶、徳兵衛女房のお辰が主役で、俠客のかわりに江戸芸者の気風が売りもの、粋な達引(たてひき)で江戸狂言の名を高めていった。
竹本の浄瑠璃の替りに、江戸長唄の合方で進行し、殺し

○：六月訪ソ公演から帰国して体むまもない歌江さん。入念な打合わせから、夕立・鷺娘のけいこ。そして女団七のお梶は初役の芸者。「ここんとこ、かさねとお岩で殺されてばかり。今年に殺すわよ、おとら婆さん！」

○：そのおとら婆に延寿さん。實川延若一門の大先輩。葉月会にはどろどろ大師の尼さんに出演しておなじみ。「嫁いびりはなア、こうしてするもんじゃ」とお梶をいじめるドロ場に執念をもやしている。

○：悪の一味に、大九郎の駒助さんと、甚内の権一さん。いづれも名題のベテランで、磯之丞・琴浦かどわかしのてれんて

出演者プロフィール

ツユ明けが宣言されたり……引込んだり。それでも「葉月会」の季節はやって来ました……。

今年には歌江さんほか十数人。毎夏おなじみの、幸右衛門・大蔵さんらは地方巡業中で留守。

代りまして、初出演の人がずらり……。

まづは、今回も元氣一杯につとめますので皆様よろしくお願い申し上げます。

始めての長セリフなど、勉強／＼の毎日。

○：優秀な二人の親分三婦に勤之丞さん。卒業も一期生で文字通り親分。長い間親しんできた前名仲助を改メ、勤之丞を名のり名題披露。イヨッ、中村屋アー。

○：一寸たりとも引くものではないけれど、三婦の顔を立てればこそその粋な役、一寸お辰に歌女之丞さんが抜てきされた。OB二期という年きもさることながら、誠実な人柄が積みかさねてきたものは大きい。

二幕目、先輩相手の徳兵衛編が、団七編とどんな達引をみせるか、興趣のひと幕。

くだに味をみせる。女団七に欠かせないスパイスがグツときいてくる……。

○：磯之丞・琴浦は、美しい男雛・女雛といったところで、鴈乃助さんは葉月会初。研修生二期のOBで、現在扇雀一門。琴浦の梅之助さんはおなじみの女形で、今年に浅妻舟に挑戦している。二人がかくれすんでいる柳橋の草加屋から幕があく。

○：草加屋の座敷でわい／＼騒いでいる三人の子分に、猿十郎、福次、又之助。いづれも研修OBで三、六、八期と並ぶ。世話物は観て楽しく、役者はつらい。猿十郎さんが新内をひとくさり、福次さんはベランメエ調、又之助さんは生まれて

○：初出演若之介さんの番頭伝八、「待春会」で活躍の段之さんのお杉、子分の国次さん、若者の吉次さん。かごに八百穂、滝二郎さんら、多彩な助演陣。若之介さんは延若一門の勉強家で世話物ゆえに進んで出演。国次さんもかつて出てくれた。吉次さんは昨年の「四谷怪談」でおなじみ。段之さんは「夕立」にも町娘で出演する。

○：最後に大話のおはなし。夏祭のみこしは「女団七」で大切な一場面。ワッショイ／＼威勢よくかついでくれているのは現在の研修在校生で九期にあたる11人。中には、女中、子分、中間役に出演している生徒もいて、今回の葉月会では大活躍の研修生である。

特報 訪ソ公演

今年の葉月会でも、「夕立」「鷺娘」、「女団七」と活躍の歌江さんは、さる六月の訪ソ公演に参加、一ヶ月のソビエトの旅を終えて六月末に帰国した。

訪ソ公演は、レーニングラード、モスクワ、トビリシの三都市で行われ

Aプロ「勸進帳」(富十郎の弁慶、福助の富樫、扇雀の義経)

「隅田川」(歌右衛門の狂女、羽左衛門の舟長)

Bプロ「吃又」(富十郎の又平、扇雀のお徳)

「隅田川」

の狂言建てで大変な歓迎ぶりを受け、レーニングラードのポリシヨイ劇場、モスクワ芸術座、トビリシのグリボエドフ劇場の各公演は萬員の盛況を極めた、



レーニングラードは寒いくらい。それでもソ連美人にかこまれてご機嫌の歌江さん



モスクワの記念の鐘の前で「道成寺」のポーズ?



トビリシは夏の季節 市街を一望の展望台にて

